

仏教文化公開講座講演録

信心の利益

普賢保之

〈利益とは〉

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました普賢です。徳永先生からは身に余るご紹介をいただき恐縮至極です。早速本題に入っていきたいと思えます。私に与えられた講題は「信心の利益」です。「信心の利益」とは、平たく言えば、信心をいただいたらどんな良いことがあるのか、ということだと思えます。この問題を考えるに当たり、まずそもそも仏教は何を目的にしているのか、ということをはっきりさせておきたいと思えます。目的を達成していくうえで、どんな良いことがあるのか、ということだろうと思えます。

〈仏教の目的〉

仏教の目的については、皆さんもよくご存知のことと思いますが、確認の意味で最初にお話をさせていただきます

す。仏教の目的は苦の解決にあります。その苦とは、具体的には皆さんが日ごろから日常の会話の中でもよくお使いになっている「四苦八苦」です。「四苦八苦」は、苦の具体的な相を示したものです。まず四苦とは、生苦・老苦・病苦・死苦のことです。「生苦」とは、「生きる苦」という意味ではありません。「生まれる苦」という意味です。なぜ生まれるのが苦なのかということについては、色々な考え方がありますが、一つには、苦しみの世界である人間界に生まれてきてしまったからです。仏教では人間界を迷いの世界、苦の世界として考えていますので、人間界に生まれてきたことを「生苦」と考えるのです。あるいは、狭いお母さんの産道を通って生まれてきたということで、それを「生苦」と考える考え方もあるようです。何れにしろ、「生苦」とは「生きる苦」という意味ではなく、「生まれる苦」という意味です。

続いて「老苦」です。「老いていく苦しみ」です。私の実家の母は、2月27日で85歳になりますが、とても元気です。私の出身は大分です。空港まで一時間ほどかかりますが、母はタクシーかバスに乗って大分空港まで行き、そこから飛行機に乗って、一人で東京まで行きます。もともと東京で育っていますから、東京に行くのは故郷に帰るようなものなのかも知れません。羽田に着くと、モノレールに乗って都心まで出て行きます。非常に元気な母ですが、その母が「長生きするのも善し悪しよ」と言ったことがあります。なぜかというところ、今まで友達といろんな話ができただのに、その友達が亡くなったり、あるいはその友達が母を認識できなくなってしまうたり、というようなことがあるというのです。それで「長生きするのも善し悪しよ」と私に話したのです。これも「老苦」かもしれません。

それから、「病いの苦しみ」「死の苦しみ」を加えたものが四苦です。この四苦にあと四つを加えると八苦になります。「愛別離苦」は、愛しいものと別れていかなければならない苦しみです。親であったり、連れ合いであつ

たりと、いろんな場合が考えられます。

続いて「怨憎会苦」です。嫌な人と一緒にいなければいけない苦しみです。これが職場であったりすると、一層苦しみが大きくなるでしょう。上司が大嫌いでも顔も見たくないというのも、この中に入るかもしれません。時には、一番安らぐ場であるはずの家庭の中が怨憎会苦の場所だったりするかもしれません。それもまた悲劇です。

次は「求不得苦」です。求めても得られない苦しみです。これは、地位とか名誉とか財産であるかもしれません。健康や男女の関係の中でも言えることでしょう。

最後八番目は、「五蘊盛苦」です。この「五蘊盛苦」をどのように考えるかということについても、いろいろな理解があるようです。一つの考え方としては、これまでの七つの苦しみと並列して理解するのではなく、前の七つの苦を総称したものと考える理解もあるようです。

〈苦の解決〉

仏教では「人生は苦だ」と捉えますが、これは現状認識なのです。「人生は苦なんだから、もうどうしようもない」と言っているわけではありません。人生は苦であるけれども、その苦をどのように解決していくのか、あるいはこの苦をどう乗り越えていくかということを問題にしています。仏教は現状をしっかりと認識した上で、その解決をはかるうとしていなのです。

親鸞聖人の妻である恵信尼公が末娘の覚信尼公に出したお手紙の中には、「苦の解決の道」を「生死出づべき道」という言葉で認められています。「生死出づべき道」という言葉は、よく耳にされると思いますが、「生死出づべき道」の「生死」とは、迷いとか苦という意味です。親鸞聖人が求められたものは、この「生死出づべき道」です。

聖人は比叡山で二十年間修行されました。また六角堂には百日間籠もられています。そして更に法然聖人のもとにも百日間通われています。その目的は「生死出づべき道」にあったのです。この点をはっきりさせておかなければ、「利益」の内容も曖昧になってしまうのではないかと思います。

仏教では苦の原因は煩惱にあると考えています。煩惱とは、自分中心にしか考えられない心を言います。自分中心にしか考えることができないからこそ、苦しみが生まれると考えるのです。煩惱をなくしさえすれば苦はなくなるのです。しかし問題は私たちに煩惱を断ち切ってしまうだけの能力があるかどうかです。『一念多念文意』で親鸞聖人は、

「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむことろおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず

と示されています。「凡夫」とはこの私のことです。要するに、私たちは死ぬまで煩惱を減することはできないということです。煩惱を減することができないということは、私たちは死ぬまで苦から解放されることはできないということになります。煩惱をなくそうと一所懸命頑張っても、私たちが凡夫には煩惱を減することはできないということですから、それが親鸞聖人のお考えです。仏教では苦の解決を目指しているのですから、その原因となっている煩惱を減していくのが理想的な在り方ではありますが、私たち凡夫には難しいということです。

煩惱をなくせば、それに越したことはありません。しかし、煩惱をどうすることもできないのが現実の私です。そんな私を親鸞聖人は問題にしているのです。『一念多念文意』に示されているように、煩惱は死ぬまで無くなることはありません。煩惱が無くならない以上、苦も死ぬまで無くならないということになります。私たちは苦の解決を目指しているにも拘わらず、生きている限り苦は無くならないということです。

苦解決への道

それでは親鸞聖人は、この苦をどのように解決していったのでしょうか。仏教には苦の解決をはかっていくのに、二つの道があります。一つは、自らの力をあてにして煩惱を滅し苦の解決をはかっていく道です。この道は理想的ではありますが、私たち凡夫にはとても困難な道です。もう一つの道は、阿弥陀仏のはたらきをあてにして苦の解決をはかろうとする道です。

親鸞聖人が法然聖人のところに百日間通って、たどり着いたのが阿弥陀仏の救いである念仏の教えだったので、これは他力の教えともいわれます。この道は今生きている間に、煩惱を無くしてしまう教えではありません。「正像末和讃」には、

外儀のすがたはひとごと　賢善精進現ぜしむ

貪瞋邪偽おほきゆゑ　奸詐ももはし身にみてり

とあります。これは、もともと善導大師のお書きになったご文をよりどころに、親鸞聖人がこのように詠われたものです。この意味ですが、「外儀のすがたはひとごと」とは、まず「ひとごと」というのは、他人事という意味ではなく、「外側に現れた相は、十人いたら十人みんな」という意味です。それを「外儀のすがたはひとごと」と詠っているのです。二句目の「賢善精進現ぜしむ」というのは、賢そうな、善人であるかのような、また努力しているかのような相をみんな見せようとしている、ということです。つまり、十人いれば十人ともに、さも自分が賢い人であるかのような、善人であるかのような、また努力する人であるかのような相を見せようとする、ということです。ところが、三句目、四句目では「貪瞋邪偽おほきゆゑ　奸詐ももはし身にみてり」といわれています。「貪」とは、食欲のことで、むさぼりの心のことです。「瞋」とは、瞋恚、つまり怒りの心のことです。自分の思うようにいか

ないときには、怒りの心がふつふつとわき起こってきます。それを瞋恚というのです。「邪」というのは、よこしまという意味です。「偽」というのは、偽りのことです。外面は賢い人であるかのように、善人であるかのように、また努力する人であるかのように振る舞うけれども、内面はよこしまで偽りの心に満ちているということです。「奸」というのは、悪賢いという意味です。「詐」は、だますという意味です。人は外面と違い内面は、人をだましたりするような心に満ちているといっているのです。

この和讃は念仏の教えに出遇って見えてきた、自身のありのままの姿を詠ったものです。しかしこれは単なる内省ではありません。念仏の教えに出遇って見えてきた自分のありのままの姿を吐露されたものです。単なる悲嘆でもありません。

〈救いの喜び〉

同じく「悲歎述懐讃」に

無慚無愧のこの身にて まことのころはなけれども

弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまふ

とあります。この和讃は、前の二句とあとの二句を一応区別して考えることができます。つまり、「無慚無愧のこの身にて まことのころはなけれども」という最初の二句は、念仏の教えに照らし出された自身のありのままの姿です。「私には天に恥じ地に恥じるような心も持ち合わせていない」と言っているのです。言い換えれば、『ごめんなさい』というような心も持ち合わせていない私である」と言っているのです。それを「まことのころはなけれども」、「つまり真実心がない」と言い換えておられるのです。

そして後半には、「弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまふ」と詠まれています。「弥陀」とは阿弥陀仏のことです。「回向」とははたらきのことです。「御名」とは阿弥陀仏の名前、つまり南無阿弥陀仏のことです。そうすると、後半二句では「阿弥陀仏のはたらきである南無阿弥陀仏であるから、南無阿弥陀仏に込められた功德は、十方すべてに行き渡っている」と仰っておられるのです。

最初二句の「無慚無愧のこの身にて まことのこころはなけれども」と言われるような私ではあっても、その私に阿弥陀仏のはたらきは至り届いていると喜ばれているのです。ですから、親鸞聖人がここで詠んでおられる和讃の内容は、単なる悲嘆ではありません。そこには悲嘆と同時に喜びがあります。ありのままの私が阿弥陀仏によって、そのまま摂め取られているという喜びがあるのです。

先ほどの

外儀のすがたはひとごとくに 賢善精進現せしむ

貪瞋邪偽おほきゆゑ 奸詐もはし身にみてり

という和讃も、表に現れているのは悲嘆する姿ですが、同時に悲嘆すべき私が阿弥陀仏によって摂め取られているという喜びがあることをこの言葉の中に見ていくことができます。

阿弥陀仏による救いとは、言い換えれば、ありのままの私が阿弥陀仏によって肯定されているということでしょう。念仏の教えに出遇うということは、ありのままの私がそのまま肯定されるということなのです。

人間には、今のこの私を無条件に認めてほしいという気持ちがあるのではないのでしょうか。自身の存在を認められることは、人間にとって一番うれしいことではないでしょうか。

〈本当の安心〉

飯塚浩という精神科医が次のようなことを言っています。

本当の安心とは合理的思考や力によって得られるのではなく、無力な自分を受け入れることである。

お断りしておきますが、この言葉が一言一句、正確かどうか、ちょっと自信がありません。しかし、こうした趣旨のことを述べておられたと思います。この文章は真宗でいうところの救いに共通する内容を含んでいるように思います。

この飯塚先生の文章を私なりに解釈してみますと、「本当の安心」とは、別の言い方をすれば、「本当の救い」「本当の幸せ」という言葉にも置き換えられるのではないかと思えます。また合理的思考をしたからといって、安心が得られるものではないと言っておられるのです。無駄のない思考をすれば、人間安心できるかと言えば、そうではないのです。感情を持ち合わせた私たちが、言い換えれば非合理的な私たちが、合理的思考で安心できるはずありません。また、安心は力によって得られるのでもないかというのです。この力というのは、地位とか名譽とか財産ということではないかと思えます。地位とか名譽とか財産を手に入れたからといって、人間は安心できるものではないのです。必ずしも地位や名譽、財産が安心の担保になるというわけではないのです。

そして飯塚先生は、「無力な自分を受け入れることである」と仰られるのですが、これは「ありのままの自分を受け入れることである」と言い換えることもできるのではないかと思えます。この場合、「ありのままの自分」はどのようなしたら分かるか、ということになるでしょう。自分が自分を振り返って分かることなのでしょう。自分のことが一番よく分かっているのは自分自身ですが、逆に自分のことが一番分かってないのも自分でしょう。人間は誰しも自分が一番可愛いですから、自分に都合の良いようにしか自身を見ることができません。そうすると、

「ありのままの自分」というのは、ぶれることのない絶対的な基準を通してしか見えてこないということになります。その絶対的な基準となるものが、念仏の教えなのです。

〆鏡の譬え

念仏と私との関係を鏡と私との関係で考えてみたいと思います。私たちは日常鏡を見るのは、自分がきれいであることを確認するためでしょう。この場合、鏡の表面が平らであるかどうかは問題ではありません。自分がきれいにさえ見えればいいのです。他人からどう見えようとそんなことは構わないのです。自分がきれいだと思います。客観的にはどうであれ、自分がきれいだと思うことで満足するのです。

このことは考え方についても言えることでしょう。自分の考えは正しいということが大前提で、それに賛同してくれる人がいればそれでいいのです。自分の考えが客観的に正しいかどうかはどうでもいいのです。それが私たちの日常の在り方ではないでしょうか。しかしこれでは本当の安心は得られないのです。

こうした日常のあり方に対して、念仏の教えに出遇うということは、基準が逆転するのです。自分を基準にものごとを見ていたのを、念仏を基準として自分自身を見つめていくのです。先ほどの鏡の譬えで言えば、表面が真っ平らな鏡の前に立つということですが、そこに映し出された姿が、初めて「ありのままの姿」だということになります。

飯塚先生が仰っておられる「無力な自分」というのも、この「ありのままの自分」ということではないかと思えます。

飯塚先生が「無力な自分を受け入れることである」と仰るのは、「ありのままの自分を受け入れることである」

ということだろうと思います。「ありのままの自分」を受け入れてこそ、そこに初めて本当の安心が得られるという事ではないかと思えます。この点は親鸞聖人が示される阿弥陀仏の救いと相通するものがあるように思えます。

今生に得る利益

それでは、信心を得て今生に得る利益とは一体どんなものなのでしょうか。ありのままの自分を受け入れるとは、換言すれば、「苦の中に生きている私である」ことに気付かされることでもあります。信心をいただいたからといって、決して苦がなくなるわけではありません。苦の中を生きている私というものが明らかになるということは、同時にそんな私そのまま阿弥陀仏に摂め取られていることに気付くということでもあります。そこに苦を乗り越えていく力が恵まれるのです。それが利益ということではないかと思えます。

信心を得る、阿弥陀仏の教えに出遇う、念仏の教えに出遇うということは、苦の中を生きていかなければならない私であるということが、はっきりと分かることでもあります。自分のありのままの姿が、念仏の教えを通して見えてきたところに、安堵の思い、安心、喜びが恵まれるのです。これが利益です。

問題は、私たちがここに価値観を見いだせるかどうかです。信心をいただいたら、煩惱が僅かでも減って立派な人間になれるのではないかと、思いたい心情は理解できますが、煩惱が無くなって立派になるということではないのです。煩惱がなくなっていくのではなく、煩惱を持ったわが身であることが、より鮮明に見えてくるということなのです。しかしただ悲嘆してしまうのではなく、そこに安心というか、ほっと安堵する世界があるのです。

親鸞聖人は、念仏の教えを通して救われたのです。『歎異抄』の第二条に

念仏は、まことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん。総じてもつて存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ。そのゆゑは、自余の行もはげみて仏に成るべかりける身が、念仏を申して地獄にもおちて候はばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔も候はめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。

と述べられています。特に、最後の「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず」は、これを現代語訳すれば、「阿弥陀様の教えが真実であるならば、お釈迦様の教説も、うそ偽りであるはずがない」という意味になります。この表現に違和感を覚えられないでしょうか。釈迦と弥陀の順番が逆だとは思いませんか。「釈尊の説教まことにおはしまさば、弥陀の本願虚言なるべからず」というのであれば分かりますが、先に弥陀の本願がきているのです。これは一体どういうことなのでしょう。この部分を直訳すれば、「弥陀の本願が真実であるならば」と訳さざるを得ませんが、この意味は決して「もし弥陀の本願が真実であると仮定したならば」という意味ではありません。この意味は「弥陀の本願が真実であるから」なのです。「弥陀の本願が真実であるから、弥陀の本願を説いた釈尊の教説がうそ偽りであるはずがない」という意味です。大事なところは、「弥陀の本願が真実であるから」というところです。

へなぜ本願は真実なのか

親鸞聖人は、どうして弥陀の本願が真実だと言い切ることができたのでしょうか。それは聖人自身が、弥陀の本

願によって救われたからです。聖人は本願の教えに説かれているように救われたからこそ、弥陀の本願が真実であると言い切ることができたのです。

前後しますが、今、私たちが弥陀の本願に救われているという事態を親鸞聖人は、「正定聚」という言葉であらわされています。「正定聚」は、「まさしく成仏することに決定した仲間」という意味です。聖人は『教行信証』「信巻」に念仏者が得る十の利益を説かれています。その中心は正定聚に入るといふ利益です。聖人の「御消息」を見ますと、

『大無量寿経』には、攝取不捨の利益に定まるものを正定聚となづけ、『無量寿如来会』には等正覚と説きたまへり。

とあります。聖人は經典を根拠に、「信心をいただいたそのときに、阿弥陀仏に摂め取られ正定聚の利益を得る」と言っているのです。信心をいただいて私が阿弥陀仏の救いにあずかるということは、同時に、臨終には必ず仏になることが約束されたということでもあるのです。「信巻」便同弥勒釈には、

念仏の衆生は横超の金剛心を窮むるがゆゑに、臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す。

とあります。念仏者は横超の金剛心、つまり他力の信心を得ているから、臨終には阿弥陀仏と同じさとりを開くことができるといふのです。

信心をいただければ臨終には浄土に往生し、さとりを開くなどということがどうして言えたのでしょうか。ここでまた先ほどの『歎異抄』の文に戻ることになります。

弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。

とあります。聖人は自らの救いの経験を通して、「本願は間違ひなく真実である」と言い切っておられるのです。

本願文には、

設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆 誹謗正法
とあります。「至心信樂 欲生我國」とは、信心のことです。また「乃至十念」とは、称名念仏のことです。

後ほど森田先生からまた説明があるかと思いますが、信心も念仏も阿弥陀仏の教えを聞きそれを受け入れた相
なのです。ですから、念仏は、頑張ったたくさん称えて、その功德をもって往生しようというような性格のもの
はありません。他力の称名念仏は数も、また称え方も一切問題となりません。これが自力念仏との違いです。自力
念仏は、自らを当てにして、自らが称えたという行為に価値を認める念仏ですから、念仏の数が多ければ多いほど
いいということになります。

信心とか称名念仏というのは本願を受け入れた相なのです。阿弥陀仏の教えを聞いた者がどうなるかということ、
本願文では「若不生者」と示されています。これは阿弥陀仏の教えを聞いた者は必ず往生させるということであり、
阿弥陀仏の教えを聞いた者は、間違いなく浄土に往生するということです。本願成就文では、信心の利益として即
得往生不退転と示されています。つまり、信心をいただいた時に往生成仏が間違いない正定聚という利益をいた
だくと示されています。こうしたことが阿弥陀仏の一番大切な願である本願文とその成就文に説かれているのです。

〈浄土往生〉

浄土往生をどうして信ずることができるのかといえば、本願に出遇い、本願に誓われたように救われているとい
う経験を通してです。こうした経験を通して聖人は、本願に説かれている往生成仏を受け入れることができたのだ
と思います。

今の救いを抜きに往生成仏の話をして、あまり建設的な議論は望めません。「浄土があるのかないのか、説明してくれ」と言われれば、説明はさせていただきますが、信を抜きにしたところの議論では、「なるほど」で終わってしまうのではないのでしょうか。往生成仏ということを考えていくには、やはり信心とその利益である今の救いは欠かせません。それでこそ、往生とか浄土ということがリアルに私の問題としてかわってくることになるのです。

＜真宗の利益＞

浄土真宗の利益は、大きく二つに分けられます。つまり現益と当益です。現益とは、信心をいただいてこの生涯のうちを得る利益のことで、入正定聚の利益を指しています。当益とは、未来に得る利益ということで、さとりを指しています。「臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す」とありましたが、これが当益です。この当益も、この生涯のうちに入正定聚の利益をいただいているからこそ、言い換えれば今救いにあずかっているからこそ、未来のさとりも得られるのです。今の救いを抜きに未来のさとりもありません。

未来にさとりを開くと、今度は還相のはたらきに出ることになります。そのことを示しているのが、

安樂無量の菩薩 一生補処にいたるなり

普賢の徳に帰してこそ 穢国にかならず化するなれ

という和讃です。「安樂」とは阿弥陀仏の浄土のことです。「安樂無量の菩薩」とは、阿弥陀仏の浄土に往生しておられる勝れた菩薩方のことです。その菩薩方は、菩薩の最高位である一生補処の相を取って利他教化に出るのです。浄土の往生人は、仏の姿を取るのではなくて、菩薩の姿を取って利他教化に出るのです。一仏一国土というこ

とで、阿弥陀仏の浄土には、仏は阿弥陀仏しかいらっしやらないのです。この和讃の「安樂無量の菩薩」というのは、そういう菩薩のことを言っているのです。

「一生補処にいたるなり 普賢の徳に帰してこそ」ですが、「普賢の徳」とは、左訓があつて意味が記されてあります。そこには「仏の至極の慈悲を普賢と申すなり」とあります。浄土に往生した者は、自分一人がさとの境地を楽しんでいるわけではありません。阿弥陀仏と同じさとりを開き、阿弥陀仏と同じはたらきをしているのです。そのはたらきを「普賢の徳」と言っているのです。

そして、「穢国にかならず化するなれ」です。浄土の往生人はこの娑婆世界に還つてきて、人々を教化することができますと言っているのです。このはたらきを還相と言います。還相は浄土に往生してさとりを開くと同時に、注意しなければならぬことは、還相のはたらきを信心のところで語つてはならないということです。信心をいだいたからといって、私たちは煩惱まみれの身が清浄になるわけではありませんから、仏と同じ慈悲の活動などできるはずがありません。

この還相のはたらきが、いかに高度なはたらきであるかということを示しているのが

安樂浄土にいたるひと 五濁悪世にかへりては

釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生はきはもなし

という和讃です。「安樂浄土にいたるひと」とは、浄土に往生した人という意味です。浄土に往生した人は、「五濁悪世にかへりては」、つまりこの世界に還つてくると、「釈迦牟尼仏のごとくにて」、つまり釈迦仏と同じように「利益衆生はきはもなし」、つまり衆生を利益する活動ができるということです。私たちが信心をいだいた程度では、還相のはたらきなんてできるものではありません。浄土に往生してさとりを開けば、私たちも還相と呼ばれる「仏

の至極の慈悲」のはたらきができると親鸞聖人は示しておられるのです。これが当益です。

浄土真宗には、前半お話しさせていただいた救いという現益があつて、この救いがあるからこそ、臨終の一念にはさとりを開くという当益をいただくことができますのです。そしてさとりを開くことは、自分だけがさとりの世界を楽しむことではなく、この娑婆世界に還ってきて、人々をさとりの世界へと導くようなはたらきをするこゝとができるということです。これが浄土真宗の信心の利益なのです。ご静聴ありがとうございました。

〈キーワード〉

苦・救い・本願・往生